

2006年(平成18年)7月22日 土曜日

うごけ！ツツ！

精神的ケアで症状緩和も

Q 口が渴いて、舌も痛むのですが、口内炎はありません。舌が心が配ります。

A 口腔乾燥症(ドライマウス)は、唾液分泌能の低下などで見られる症状です。シェークレン症候群(唾液や涙が出なくなる病気)や糖尿病、加齢、また、降圧剤や眠剤などの副作用が主な原因です。しかし日常臨床においては、原因がはっきりしない場合が圧倒的に多いのです。そして多くの患者さん

が、ドライマウスだけではなく、口腔異常感(舌の痛み、味覚異常など)を訴えます。昨年、当院において、舌の痛みや口腔乾燥、味覚障害などの口腔異常感を訴えて来院した方が100人を超えましたので、評価可能な95人を対象に、その臨床

ヒリヒリする、痛い(67人)、「口が渴く(45人)。特殊な例では、「舌の存在感が気になる」「かみ合わせがだんだんずれてくる」「口から虫がわいてくる」などがありました。

③口腔内の所見 口腔内異常感を訴える95人のうち、3人に口腔がんが発見されました。しかし、60人(63.2%)は異常所見が示していません。以上により、検討結果をまとめると、性、年齢別では、圧倒的に中高齢者の女性に多くみられ、患者の主訴と実際の臨床所見、臨床検査とは大きな隔たりがありました。原因別では、精神的ストレスが原因と考えられる方が3分の2を占めていました。ストレスが招く口腔異常感、臨床検査

口腔異常感症状はストレス社会や食生活の乱れからくる現状が続くときは専門医に診代病と言えるでしょう。口でもらうことを勧めます。

的検討を行いました。①性別、年齢 女性と男性ではそれぞれ80人と15人で、その平均年齢は69.6歳(23~83歳)と68.3歳(50~78歳)でした。②主訴 口の中や舌が

平田口腔顎顔面外科・腫瘍内科がんウィレッジ札幌
平田 章二氏
東京医科歯科大顎顔面外科、ドイツケルン大医学部留学、札幌医大口腔外科などを経て2003年、札幌市白石区南郷通7に開院。

なく、また、血液検査でも異常はありませんでした。④治療 内服として抗がん剤、鎮痛消炎剤、そして安定剤や抗うつ剤を処方しました。安定剤や抗うつ剤を示したことは、原因として、精神的ストレスが考えられるでしょう。また、体内の活性酸素や有害重金属(特にヒ素、水銀)の測定結果では多数の方が高値を

上、異常がないことから見過ごしがちです。

その結果、当院では、投薬とともに傾聴を取り入れた精神的アプローチも行っています。また体内の活性酸素や有害重金属が増加している方には、食生活指導を行い、体内浄化を勧めます。このように、口